

習書要訣

——美の認識について——

北大路魯山人

青空文庫

普通習書と申しますと、ご承知の通り筆をもつて習うことが主なのでございますが、実は筆をもつて習うということもさることながら、書を分ろう、書というものはどういう「質」のものであるかということが分りたい、分らなくてはならない、そういう「書性」とでもいうことをお互いに分つていこうということが主でありまして、書く方が第二なのであります。私の考えでは、結局、分らなければ書いたって仕方がない。分らないで書いているということは、盲目的に筆を振っていることであるから、その結果が良いのか、はつきり自分も分りはしないというようなことに陥りやしないかというのであります。

それで、私が今までに経験しましたところによりますと、これから申しますようなことは、どうも我々の先輩がいつておいてくれなかったことで、それからまた書物にも余り書いてないように存るのでございます。書の上手下手は、いろいろな形容詞をもって、ことに中国では巧みな形容詞を使って説明してありますが、いずれも抽象的でありまして、我々を心の底から動かすというわけには行かない。それで、我々が知る範囲の人たちをもつて私が経験しましたところによりますと、訳が分らずに書を恐がるのか、書けないことを無闇に恥ずかしがるというようなことでございます。これは畢ひつきょう竟するに、書という

ものがどういふものであるか、という点をよく把握しておらないために、恥ずかしい、恐いという感じがするのであると思うのであります。

例えば一国の大臣というような人たちになりますと、いずれもが何事にも一見識を有し、物事に恐れぬ人が多いようでありますが、それでも一度字を書いていただくというようなことになりますと、俺は字は全く閉口だ、書を書かされては叶かなわぬといつて固辞される。あるいはほつと顔を赤くされるといふようなことも見受けるのであります、それはどういふことであるか、書が下手だつて恥になることにはないはずである。下手といふのは一体なんのことか、下手だつて別に恥ずかしいことではないじゃないか、生まれつき鼻が高い人もあるが低い人もある。低いからといつて別に恥ずかしいことはないではないか。それは生まれつきだから仕方がない。鼻の高低は必ずしも人相の高低を左右するものではない、といふような訳で、別に書が下手だからといつても、それは習う縁がなかつたから習わなかつたまでで仕方のない話である。また、書道を理解する機縁がなかつたので、理解するに至らなかつたから仕方がないのであります。また、習つておるけれども普通にいふところの上手になれないこともある。上手といふことは一体どういふことだからつきり分らずに、ただ下手だから恥ずかしい、書けないから恐い、従つて無意味に頭を搔くとい

うようなことになるのでありますが、この点をよく呑み込んで分っていないと、それこそ恥ずかしいことになって、常に不愉快だと思うのであります。

中国の書

書のことになりますと、書に關係のある方が百人集まるとして、九十九人までが、どうも中国の書は上手だというようであります。また、習書した経験ある方に限つて、なおさら、中国の書をそう感ずるのであります。書は断然中国に限るといふようなことを、これもまた、多くの人が皆独り決めする習慣がありますが、私の見るところではそうではない。中国の書は例えば容貌風采のよい人間のようなもので、その人間は果してどれ位偉い人か偉くないかは別として、畢竟、容貌風采がよくて出で^いたちがよいと、とかく買^かい被^かる。そういうようなふうが中国の書なるものにあるのであります。中国の書は大体において形がよろしゆうございます。そうして、あるタイプを努めて習つて仕上げておるのであります。例えば、三角とか四角とか円とかきまつた形が如何^{いか}にも整つてゐる。それは練習の結果なのであります。形が整つて、容貌風采がよくなると、人間の場合でも、一見買^かい被^かるよ

うに、その書もまた買い被り易いのであります。形が整っておつて、それがよいということになるのであります。手腕的練習さえすれば、特に不器用な人でない限りは書けるに決まっています。例えば床屋の小僧などが三年もすると、どんな頭の刈り方でも覚えてしまう。あるいは大工の小僧でも三年経つと板が相当に削れる。それと同じに字だつて、三年もすれば一通り体裁よく書けるのは当り前のことであります。そんな訳で形が整うばかりが尊いのでありますならば、それは本当にやさしいことだと私は思うのです。ところが、ただ形ばかり風采容貌ばかりが整つたつて、必ず人がみな賞讃してくれぬように、書風書体ばかりが体裁よくできたからといって、別に誇るに足らぬと思ひます。また、そういうことは古くからいわれておりまして、風貌の一見して醜い人でも、人間として、非常に尊ばれている人が昔から沢山たくさんありますのは、みなさん、すでにご承知だろうと思ひます。

書家の書

形ばかりのことで申しますならば、書家の書というものは一番上位に置かれなくてはな

らないことになるのであります。ところが、日本で申しまして、ここ百年とか二百年ぐ
 らいの間におきまして、あるいは明治になりましてからでも、相当形のよい字を書いて世
 に現われた人がございますが、それは必ずしも、その人の歿後いつまでも尊敬されてはお
 らないのであります。そういう点に考え及びますと、形ばかりがよくたってなんにもなら
 ないのであります。そんな書体の可否ぐらいのことは手先でやれることだし、ちよつとし
 た器用さでできることでありますから、形ばかりを云々うんぬんしてみたとところで仕方がないの
 であります。

専門家の習書

書家の書の習い方のように形にばかり、体裁にばかり重きを置く書の習い方というものは、これは余り重んじなくてもよい。そうしてまた、あるタイプを、その形通りに、是非ともやろうという書き方は誤ったことで、ただ素人眼に体裁がよいといったところで、それがどうなるのだということになります。それで今ではありませんが、近い過去にある書家がありまして、その書家に門人がたくさんおったのであります。その門人は五十人が

五十人、百人が百人とも、みな同じように師の書風そのままに書いた。ある書家の門人は、その先生と全く同じ字体を書く、また、ある別の書家の門人も、その先生の書体そのままを書く。ところで、それがどうなるかというところ、別に書いたというだけの話で、なんの価値もない。識者の考えます場合、ただ、形がまとまった努力に対して、誠にご苦労様であったというより他に仕方がないだけなのであります。それで、これらの点について、如何に処するかを、これから一々研究したいと思うのであります。

愛書家の習書

軍隊の教練のように、兵卒が百人が百人、お一二いちにというわけで、足を揃えて歩むむが如ごとき習い方をする書家の書道は、個々について見ますとき、誠に不見識で、是非とも百人が百人違った結果の字を書かなければならぬと思えます。自分の本当のりょうけん了簡で、自分の嗜好で、自分の見識で習いますときに、たとえ先生が一人であっても、習う者が百人おりましたら、百人とも違った字ができるはずであります。それを、先生が一つの手本として書いたのを渡す。あるいは印刷したのを渡しまして、みなに教えるというようなことは、全

く先生のご都合であつて、そういう教え方は全くまちがっているし、それを習うということも、非常に不見識だと思つたのであります。

そこで、昔からたくさん良書、能書が残つておりますから、その中でもっとも自分に適するもの、自分の個性に一番よく合うもの、自分の性分として、こういう字が好きだとか、こういう字が嫌いだとかいうようなわがままを敢えていたしまして、自分の好き気儘きまままな習い方をするのがよいと思ひます。習いますについては、気儘な手本の選択をするのがよいと思う。それでも、まるきり問題にならないような字を問題にいたしましたは、これもとより誤りであります。古来やかましくいわれておりますところの書には、そんなにまちがった例はないようでございますから、ぎこちない角張つた字が好き人は、その種の良い字を習えばよろしい。

例えば、顔魯公がんろこうの楷書のようなものも、一見ぎこちないようであります。非常に自由な書き方で、かえつて明代あたりの祝允明しゆくいんめいの草書などよりも自由に楽に書いてある。全く祝枝山しでん（允明）の草書よりも顔魯公の楷書の方が、ずっと自由に書いているというよなこともありますから、そういう字を習われるのも宜しい。また歐陽詢おうようじゆんのようなスタイルのよい貴公子ぶりの楷書を習われるのもよいと思ひます。どちらが別に悪いという

ことではなく、皆相応なものでありますから、そういうふうを考えられて習われたらよろうと思うのであります。

愛書家の心得

書も習うということになりますと、とかく他所よそ行きの姿になりやすい、いわゆる気張って書く。なんのために気張るのかというと、そこまでは考えないで、なんだか知らぬで気張って書こうという了簡りょうかんが起るのであります。これが手紙やなにかを書きますと、そう考える余裕や閑ひまがないので、すらすらと大概の人は書きます。結果から見ると、大抵の人は手紙なら生きた字を書くが、あらたまつたものを書くときには、うんと技量が低下して字が死ぬ。いわゆる匠しやうぎ気きというものが出て来る。別に金を取る匠人しやうじんでなくても匠気しやうぎというものが生じるのです。つまり、虚栄とか虚飾とかいうものが自然と生じて来る。そういう場合は体裁よくは書けますが、その体裁がよいというのがかえって悪い結果を招いておるのであります。

手紙を書いたときの方が実に上手で、今度、体裁張って如何いかにも格好よく書いたときは、

かえってそれが悪い死作になっておるのであります。そういたしますと、体裁のよい字と
いうのは、これは別に必ずしもよいのじやないということになるのであります。要するに、
それは書道趣味者の眼を喜ばせるだけであつて、自分が心に顧みたときには、なんだか心
苦しさがあつて、良心に咎^{とが}めるものが残る。また識者から見るときには、誤つてつまらな
い点に力を入れて気張つておるものだ、というような思われるのであります。それこそ骨
折り損でつまらないのであります。

そこで形をよくして、内容を尊く、よくするということになりますと、申し分ないので
あります。では一体どうしたらよいかといひますと、それには書概念知識というものを
根本的に進め、他方手腕の猛練習をやるより外^{ほか}に仕方がありません。練習が足りませんと、
筆が自由に運びませんから、勢い不自由な造り字になってしまう。従つて思うように練達
的な線が引けない。それについても、初めから計画して線を引いたり、点を打つたりして
書くということは、根本的にまちがいだと思ひます。

初歩的未熟だから、習書の心掛けで計画して書くということは仕方がありませんが、最
初から一点一画を計画するため不自然になり、自由に筆が運ばない。そのために、不自然
な線を書き、不自然な点を打つことはまます実例であります。改まると手紙を書いたと

きのように自由な線にならない。改まつては、無意識に気張る。つまらなく見当ちがいな方面に力ちからこぶ瘤こぶを入れるために、不自然な線ができて、識者から認められないというような結果を招く実例は、習書家に見る常態であります。

技術の練習

技術的には、なんとしても練習をさかんに致すことであります。技巧の練達は、昔から申しております技神に入るといふことになるのでありまして、はか図らずも自分の予想以上の実力が練習の結果として生ずるのであります。自分の思いも寄らない結果が起こつて来るのであります。ところが、これを簡単に申してみますと、技神に入るといふことは、誰しもいつておつて、それでお互いが分つておるつもりであります。この技神に入るといふことは、一体どんなことかという点を、余り詳しく解かれておらぬようでありませんが、これはとりもなおさず、精神的なことだと思つておられます。なるべく精神的に腕を働かすこと、理智的性能ばかりではない。この頃の言葉で申しますなら芸術的である。芸術というのは、理性のみの産物ではない。これは主として精神的なものであつて、その人の個性

とか、俗にいう魂とかいうものが、その作品の中に織り込まれて精神的なものになって来る。技術があるところまで練達しますと、技巧が自ら精神的になって来る。従って図らずも思いがけない結果を顕わして来る。そこで初めてその書が自分の身についたとか板についたということがいえるだろうと思うのであります。

かように猛練習をやりまして、盛んに書く結果、能書が生まれて来るのであります。しかし、誰でも普通に猛練習をやっておつたら、ある程度に入神するかと申しますと、ただ、これは習っておつただけではいかぬと思います。

名前を表わして相済あひすまんと思いますが、明治年代の書家中、林なかはやし梧竹しごちくという人は、毎日朝起きると五百字いつも手習いをするとかいう話を私は聞いておりました。ところがその結果はどうかと申しますと、今日から見ますと、一向感心した書ではないのであります。それでも今日名書家とかいわれている人々に比しては、狙いも調子もよし、筆の運びも秀れておりますが、もしそれを副島そえじま伯爵の書と較べてみますと、副島伯は書家風の書を学んでおりながら、しかも、書家風には学んでいないところの自己流でもあるかの如き自由さがありまして、ちょうど梧竹翁は副島伯の書の贗物のように、また副島伯が名優であるといったしましたら、梧竹翁はその声色こわいろづかいのようなものでありまして、声色づかいで

は幾らそれが上手でも結局は声色づかいで、永久に名優ではないのでありますから、全く価値がないのであります。しかし、今日においては、まだ一方に梧竹信者がおるようであります。これが、これとても、段々と消えてなくなるものだと私は信じております。

では書道を根本的に理解して段々手習いしていけば、お前のいうように書が上手になるかというふうに詰問されると甚だ困るのであります。これにはまた生まれつきというのがあります。俗にいう瓜の蔓には茄子はならぬと申しますように、瓜は瓜にちゃんと生まれついておるのですから、いまさら瓜に茄子がなるはずがないのであります。しかし、それは少しも恥ずかしいことではない。自分は自分だけの天分を守って、自分に安んじて可なるものだろうと思うのであります。

習書の根本

要するに人物が出来ておらなければならぬ。人物が出来るといふのはどういふことかと申しますと、人物の出来る修養をしなければいかぬということでありまして、今度は手習いでなく人物をつくる方が根本問題であつて、これが一番書道の上にも肝要なことであり

ます。書を習うということ、即人物をつくるということになるのであります。

しかし、なるほどと分ったからといって、すぐに人物を向上さすという訳には行かぬ。

如何に習書上練達の人物が字を書いた所で、その人物（人間の価値）だけしかの字の価値はない。ところが人物が立派であれば、別に字を習わなくても相当能書的な字が書けるものです。例えば、東郷元帥の如き、その書は書家から見ても決して上手な書ではない。習われた書でもない。実にかむしやらな字だと思えますが、それでも東郷元帥の見識で、下手上手ということでなしに、俺が書いたら良い字だというような調子で、あの人の個性そのままが出ておつて、かえつて愉快に生きています。これはやはり人物が相当に出来ているから、ああいう釘折れのような字でも、ちゃんと見られるのであります。

要するに人物の値打ちだけしか字は書けるものではないのです。書けるといふと語弊がありますが、字というものは人物価値以上に光らないものです。入神の技も、結局、人物以上には、決して光彩を放たぬものであると思ひます。ゆえにこのことを常に心掛けて置きます。人物をつくる心掛けと手習いと両方致しましたならば、なんとか向上して行くものであろうと私は考えております。

それで、「形」、いわゆる書で申せば書体に捉われないこと、書体を余り有難がらない

こと、最後に手習い致します心掛けとしては、手本通りを望まないこと、その通り似せて書こうとのみ考えないことが肝要であります。

習書と手本

例えば、ここに大雅たいがの書があります。これを習おうと思えます場合に、どこからどこまでこの通りに書こうとしない为好しい。ごらんの通り「花柳自」という字は続いておりますが、習います場合には、やはり、あの通りに続けなくては習ったことにならぬと思つて、丁寧に続けて書くことを習うというような習字法が普通に行なわれておりますが、そういうことはどうでもよいことと思ひます。要はただ気持の点で、あそこを続けてみて気が好い、あの続けたところに仮りによいところがあるとすれば、自分で書く場合に實際より太くなつても細くなつても、そういうことはどうでもよい。太くなるか細くなるか、続けるか続けないか、こういうことは初めから分らないとしてよい。書いて見なければどうなるか分らない。この大雅の書もはじめから、こういう点を決めて書いている訳ではないと思ひます。

金になる書と楽しむ書

明治になりましてからの書家には、往々そういうことを決めて書いているのが随分あります。これは幼稚な人から見れば、某の書は何十回書いてもちっとも違わないと感心しておりますが、それは感心することではなくして、むしろ笑つてよいことだと思つのであります。何十回、何百回同じ字を書いて少しも違わない字が書けるということとは、造り癖が出来ている証拠で本当によいのではない。かといって、いたずらに違えようとする計画でなく、自由な気持と練習の結果、自ら百字が百字違つて来るようにならなければならぬと思つのであります。そこで形に引つ掛かり、こうでなければならぬということになると、その心持は、すでに他所よそ行きの作意ある心持となつて、人に見せるための字になつています。自分で嗜たしなみに字を書くにあらずして、人に見せるといふ見栄を切る不純な簡があるために形に引つ掛かつて来る。それが看板書きだとか、あるいはペンキ書きのように体裁のよい字を書いて飯にしようというような人は、夫それぞれ々条件に注文があるのでありますから、勢い金になるとか、報酬を貰える書を書かなければならぬという立場上、仕方がないと思

うのでありますが、そうでなく自分だけの嗜みで、また楽しみで書というものがなんとなく好きのために、上手な良い字を書いてみたいというふうな字に習うものならば、必ずしも形や体裁に引掛かる必要がない。それは自分だけが得心して行けばよいので、そういう考え方が本格的の意味において立派な字を生んでおるように思うのであります。結局、自分の字というものが生まれて来ないとおもしろくない。

相当な人物になると、たいてい誰その字という一種の見識ある字が生まれて来るようでございます。

手習いよりも鑑賞

とにかく自分の習った他人の書は、やがて自分に帰ってくるといったところまで行かなくちゃならないと思います。それでなければ意義がない。兵隊のように百人が百人とも同じに歩いているのでは、書の場合としては仕方がない。そこに至るには、どうしても良い書を余計に見ることで、眼で見て習う。

まず、手に習う前に眼でよく注視する。しかし、ただ眼だけで見ておったのでは腕の上

には仕方がない話ですが、第一はこれを子細に検討してよく注視して見ることだと思いません。この眼で見て習うということは、小さな形などに捉われないことになりまして、いろいろな良書を多数に見るようになり、容易に一つのものに引つ掛からないで済むようになり、そこに自ら自分の好みというものが段々とはつきりしてきて、本当に自分の書が書けるようになるのであります。

手本を一つのもので限つて、それを堅く守つて習つても、あえて差支えありとはいいませんが、また十種類の良書をそこに置いて、あちらなり、こちらなりを嚙かじり習つておるのもよいと思いません。段々そのうちに初めはよいと思つていた良書が、一番最初の好みから見て、二、三番目の書がよい、三番目のより五番目の書がよいということが会得されて来まして、かように沢山のものを見て習う習い方は、非常によい方法だろうと思ひます。つまり、立派な先生と沢山につきあう事であります。

とにかく、なんとしても自由に書く、習うということがモットーでなければならぬと思ひます。

西園寺公のような書でありますと、例えば明代の書を好まれるかも分りませんし、また温おしな順しい当り前の書き方ですから、特にどうということはありませんが、その人の見識が

それでよいならば、それでよかろうと思います。大雅の書のような自由な書き方も一々実は抛り所がありまして、隙あるが如くして、五分の隙もない書き方ではありますが、しかも非常に自由な書き方で、内容がまた非常に美しいのであります。今ここに掲げてある大雅の書を見て思い出しましたが、「花柳自無私」という文句の中で、この終りの「私」という字が仲々読みがたいので困りますが、字画の意義を悟るといふ点からもなかなか自由に書いてある。結局草書はどうかこうかして読めればよいということになっておるようでありますから、字の崩し方はどうでもよい。全くどうでもよいとはいいますが、字の崩し方というものは、遠い昔から研究しつくされておつて、今ではどんな崩し方を発明してみたところが、往昔においてちやんと研究してありますから、現今では崩し方の創意創作ということとは全く許されないのであります。しかし、わざわざ故意にするということはいけません、時の調子で、理屈に合わなくても、字画に合わなくても、そういうことには、なんら頓着しなくてもよいと思うのであります。

能書は優美でなくてはならぬ

ここにまた書を習いました結果の望みごととして、真の能書を期待いたしますのには、是非、一つ頭に入れてかからねばならぬことは、書が優美でなければならぬということでもあります。優美でなくては、良書の価値がないということでもあります。

これは従来余り書道会などの人々にはいわれておりませんが、従ってそういう審美眼を進めねばならぬとか、美術、工芸、書画骨董、建築、織物、陶器、漆芸、造園とか、そういうすべての美がわかるようにならなければいかぬという教育をしている書家を残念ながら知りませんが、ともかく、能書には美がなければならぬと思います。先刻申し上げたように、東郷さんの書などは、見識はなるほどございますが、やはり武人でありますためか、また、その人の性格が然らしめますためか、美が欠けております。この美が欠けておるということは、書としてまことに惜しいことでもあります。

むかしから遺つております立派な能書には必ず美が備わっておるのであります、美のない書というものは決して上位には置かれぬ。名を成している書は必ず優美さがあるのです。その点、中国人の書よりも日本人の書の方が、実に優美なものを多量に含有しております。それで日本人の書は非常に美わしく、親しみがあるので、結局、日本人にとって、日本の書が一番相応わしいものということになります。

能書と俗書

日本における書道史上、有名な坊さんにしても、京都の大徳寺の坊さんは、ご承知の清せい巖いがんにしても、江月こうげつにしましても、また春屋しゅんおくにしましても、非常にみな優美であります。また、近頃やかましくいわれております良寛りょうかんの書にいたしましても実に美しいのであります。ところが、黄檗おうぼくの方の坊さんとは見ますと、これは隠元いんげんにしましても木庵もくあんにしましても、いずれも優美さの点では劣ります。一種俗悪なものが黄檗の坊さんでありまして、比較しますと、一見してこれは俗書であると思われれます。片方、大徳寺の方が優雅な書であるとすれば、黄檗の方は俗書といい切つてもよいと思う。なかには特色のある人もありますが、大徳寺の方の書と較べてみましたら、問題にならぬ俗書であると思われれます。

中国人は概して年代が新しくなるにつれ、俗書が多くなつてまいります。日本人にしましても、大体はそうであります。それでも儒者中で物徂徠ぶつそらい（荻生徂徠）の如きは、やはり優美性が十分あります。山陽さんようの書にいたしましても、物徂徠のような具合には行き

ませんが、それでもあれだけの画の描ける人でもありますし、とにかく美を解した人ではありませんので、その書も一応は見られるのであります。が、徂徠のように底力もありませんし、自由そうに見えても、本当はそう自由でもありません。これはまあ文化、文政頃のことで、芸術の頹廢期にあつた徳川末期のことですから止むを得ぬと思ひますけれども、山陽というもの、それはたいして問題にすることもなからうと存じます。また竹田ちくでんにいたしましても、やはり、あの時代の人の作として非常に賞玩されたのは、一に優美性、風流性が豊饒であつたがためでありまして、竹田の画も、書もやかましくいわれたのは無理もないことだと思ひます。

明治になりましてからでも、副島伯の書が問題になりますのは、やはり、優美が沢山含有されておりますためです。あの字を見ていて、段々見上げる字になりますのは、人物として立派な上に、優美性が具わっているせいであります。先程お話しました中林梧竹になりますと、遺憾ながら優美の具わりが不十分で、美術価値が低いのであります。それから、貫名海屋ぬきなかいおくというような人が相当やかましくいわれた時代もありますが、これは竹田には固もとより及ばず、山陽にも固より及ばずという程度の低いものでありまして、その画も南画の描法を脱し得ぬほどのものであり、たいして有難いものではありません。書など

も筆法的に行届き過ぎて、腕の人としては全く立派な技術家でしたが、結果的には重箱の隅をほじくるように女性的でありまして、どうでもよいことに行届き過ぎます。もう少しぼんやりした自由な抜穴があつてもよかつたのではないかと思えます。これはまあ私の観た批判でありまして、好むところまた各々別でもよろしゅうございますが、比較上批判的に申しますと、ああいうふうなゆとりのない、ガチガチに行届いた字は、習う方にもよろしくないし、その結果はおもしろくないと思えます。

能書の時代

かようなことを申してまいりますと、結局、書は少なくとも日本人の書でも現代から三百年位前の人の書がよろしい。それからもつと溯さかのぼつて五百年位前になればなおよろしい。もつと溯つて、弘法大師時代になれば、殊によろしいということになって、古いほどいいということになると思います。

それで自分がこんな字を習うのは自分の柄ではないということであれば、致し方ありませんが、調子の高い良書について習うに如しかずと知る上は、初めからその方に近寄って行

った方がよいと思いません。

しかし、各々分ぶんざい際がありまして、まるきり柄にもない字を初めからやったところで、とても追いつかないこともありますから、自分に本来に出来るものからやり始めようという考え方でやられるとよいと思えます。棒ほど願つて針ほど叶う、という譬たとえもありますから、なるべく古く逆行して、調子の高きに就くが賢明だと思えます。

自分を語る

しかし、私自身がこういつておりますと、字が書けそうに思われるかも分りませんが、私はいつておるだけであつて、字は一向に書けないのであります。一体、世の中のことが分つたら、分つたように出来るかと申しますと、それはなかなか出来ぬのであります。分るといふことと、出来ることとは全然別であります、分つた如くに、すべてのことが出来れば、世の中というものは簡単であります、そうは問屋が卸おろしませぬ。従つて書も分つたら、すぐにも書けるだろうと思つても、左様にはまいりませんのであります。しかし、とにかく分るといふことが一番必要であります。何のことか分らないで、盲目

的に筆先ばかりで書いておったのでは仕様がなない。それではどうにもならないというよう
なことを考えつくしました結果、なんとかして段々に書というものを解体し、分らして行
きたいと僭越ながら考えました次第でございます。

まず書道というものは、大体そういうようなものだと思っていたただきたいと思ひます。

(昭和十年)

青空文庫情報

底本：「魯山人書論」中公文庫、中央公論新社

1996（平成8）年9月18日初版発行

2007（平成19）年9月25日3刷発行

底本の親本：「魯山人書論」五月書房

1980（昭和55）年5月

入力：門田裕志

校正：木下聡

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

習書要訣

——美の認識について——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北大路魯山人

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>